

派遣者番号	R4J01	氏名	蒲 健一
研究主題 —副主題—	中学校保健体育授業における「支える」学習に関する研究 —球技種目の審判に焦点を当てて—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	佐藤 善人
所属	千代田区立神田一橋中学校	所属長	盛谷 樹

キーワード：支える 審判 スポーツ価値意識

要旨： 保健体育は、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するために重要な役割を担っており、運動やスポーツの楽しさや喜びを味わい、生涯スポーツへとつなげる上で、自己の適性に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を関連付けることが求められている。スポーツ大会において様々な角度から大会や運営を支える人々、10代のスポーツボランティアによる審判や指導等の経験は、これからのスポーツ環境を維持していく上で必要不可欠であり、体育授業における「支える」学習の在り方について検討することが求められる。

卓球とバドミントンの授業実践に対して、授業前後で質問紙(運動有能感尺度・スポーツ価値意識評価尺度)調査を実施し、得られた回答を統計解析した調査結果を基に、効果と課題を明確にする。

本研究から中学校保健体育授業における「支える」学習の具体的な在り方や体系化を提案したい。

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

保健体育は、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するためには重要な役割を担っている。しかし、運動やスポーツの楽しさや喜びを味わい、生涯スポーツへとつなげる上で、自己の適性に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を関連付けることが求められているが、実際の体育授業の内容は「する」に関するものに傾重しており、「支える」について、具体的な学習の在り方について示されていない現状がある。

国内で行われる世界大会をはじめ、部活動や地域で行われるスポーツ大会において様々な角度から大会や運営を支える人々、10代のスポーツボランティアによる審判や指導等の経験は、これからのスポーツ環境を維持していく上で必要不可欠である。運動やスポーツにおける「支える」関わり方は多様に存在しているが、「支える」について、いつ、何を、どのように教えるかについて具体的な例示は示されておらず、学習の効果や方法を確立することは、日本における生涯スポーツを推進する上で重要な課題になるのではないだろうか。

以上のことから、本研究は、現在行われている保健体育授業について客観的に振り返り、多様な関わり方における課題を明らかにすることで、より豊かな運動やスポーツへの関わり方ができる中学校の保健体育授業を実現すること目的として、「支える」学習の在り方について検討する。

2 研究の方法

(1)対象者

東京都内公立中学校 第3学年219名

(2)授業計画

卓球7時間、バドミントン7時間の授業を男女共習で行った。授業を担当したのは、教職歴15年の男性教諭、教職歴35年の男性教師2名であった。授業の撮影及び分析を含め実践の了承を管理職に得た後、具体的な学習内容を担当教諭と議論の上決定し、図1の授業計画に沿って進めた。授業実践中は毎時間授業参観を通じて、計画通り授業が進められているか議論を重ねながら実践を行った。

2クラス合同の男女共習授業で行い、単元前半の競技はこれまでそれぞれの教師が実践してきた授業の流れで進行し、ルールや審判法の学習については実施せずに行った。競技を入れ替える際、研究者自身により2クラス合同のオリエンテーションを行った。内容は、1年で学習した体育理論「運動やスポーツ

の多様な楽しみ方」の振り返り、後半の学習で考えたい「支える」関わり方である。加えて「支える」を意識した学習を進める上で必要であると考えられる図2に示した全体の共通ルールについて学んだ。

(3)調査方法

単元の1時間目事前、8時間目事前、15時間目事後の3回、質問紙による調査を行った。質問紙は、公益財団法人日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会(2016)が作成した「支えるスポーツの価値意識評価尺度(通常版)」,岡沢・北・諏訪(1996)が作成した「運動有能感尺度」を用いた。統計処理にSPSS.24.0を使用し、一元配置分散分析(対応あり)で分析を行った。また、1回目と2回目の質問紙調査で、「運動やスポーツで『支える』とは、どういう姿だと思いますか」という質問について自由記述で回答させた。加えて、3回目の質問紙調査では、「運動やスポーツで仲間を『支える』姿として、自分にどのようなことができますか」という質問について自由記述で回答させ、KH coder3を使用し、テキストマイニングで抽出語の出現回数と抽出語間の共起性について分析を行った。

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時	第11時	第12時	第13時	第14時	第15時	
KC 組	卓球							バドミントン								
	実習指導①		基本練習		正式ルールでの試合			基本練習		正式ルールでの試合						
	練習計画作成		[ラリー、サービス、スマッシュ練習]		リーグ戦 (グループ内)		リーグ戦 (校庭レベル)	全体オリエンテーション		[ラリー、サービス、スマッシュ練習]		リーグ戦 (グループ内)		リーグ戦 (校庭レベル)		実習指導③
			お話しゲーム							お話しゲーム						
BDF 組	バドミントン							卓球								
	実習指導①		基本練習		正式ルールでの試合			基本練習		正式ルールでの試合						
	練習計画作成		[ラリー、サービス、スマッシュ練習]		リーグ戦 (グループ内)		リーグ戦 (校庭レベル)	練習計画作成 役割確認		[ラリー、サービス、スマッシュ練習]		リーグ戦 (グループ内)		リーグ戦 (校庭レベル)		実習指導③
			お話しゲーム							お話しゲーム						

図1 授業計画

<p>○授業全体</p> <ul style="list-style-type: none"> 準備、片付けは自ら率先で行う。 卓球台バドミントンコート の設置、その他使用する用具。 <p>○練習 (グループ活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> 練習メニューは、グループメンバーで事前相談によって計画・実践する。 準備運動の内容についても、グループ毎に行う。 仲間のアドバイスや応援の声を大切にす。 タブレットを使って、体の動きを分析する。 <p>○試合</p> <ul style="list-style-type: none"> 試合前・試合後の挨拶は、礼儀正しく、元気よく行う。 試合終了後は、両プレイヤーおよび審判とハイタッチやグータッチを行う。 ※ 握手は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として行わない。 審判に対するリスペクト 判定への文句や異議を言わない。 難しい判定は、副審や線審と相談をし、結論が出ない場合はレット(やり直し)とする。 審判(主審・副審・線審)は、試合に必要な用具の用意、確認を行う。試合後は、得点および勝敗の記録・報告を行う。 周囲で見ている仲間は、試合をしている人へのポジティブな声掛け。 「ナイスプレイ」「惜しい」
--

図2 「支える」に関する共通ルール

3 研究の結果

(1)支えるスポーツの価値意識評価尺度について

今回の授業実践では、8時間目の全体オリエンテーション後、生徒の学習因子、キャリア因子、地域奉仕因子が高まった。その他の因子の数値は向上したものの、統計上の差はなかった。

(2) 運動有能感尺度について

今回の授業実践では、生徒の身体的有能さの認知を高め、統計的には差はないものの統制感や受容感をやや低下させる結果であった。

(3) テキストマイニングについて

1時間目事前と15時間目事後を比較すると、1時間目事前では出現回数が3回であった「審判」が、15時間目事後では57回と大幅に増加した。同様に「準備」が出現回数11回から39回、「アドバイス」が出現回数11回から30回、「教える」が出現回数17回から29回、「応援」は出現回数33回から38回へ増加した。一方、「仲間」が出現回数39回から27回、「協力」が出現回数27回から6回に減少した。出現回数が多い抽出語の比較から、今回の授業実践により生徒は「審判をすること」、「仲間に対してアドバイスをすることや教えること」、「協力や応援をすること」が、支える関わり方として理解が深まったと言える。

4 研究の考察

支えるスポーツの価値意識評価尺度の調査結果から、中学生の体育授業における「支える」関わり方について、学習因子、キャリア因子では、学びから得た知識や技能、それまでの経験を自分の将来や自己の目的に活用できる可能性を得た。さらに「支える」関わり方が、自己の知識・技能に関する肯定的認知、スポーツへの関わりという行動レベルの認知を向上させるということが明らかになった。

運動有能感尺度の調査結果から、身体的有能さの認知の因子では、活気ある授業の中で技能を向上させ、運動に対する自信をもつ要因になる可能性があるという結果を得た。さらに運動を楽しめる仲間との関係性や愛好的態度を高めるためには、男女共習やグループ学習において、運動に対する自信の有無に関係なく協働することが重要であるということが明らかになった。

自由記述の分析結果から、「支える」関わり方を具体的に示し、理解を深めることによって、仲間との教え合い、指導者・コーチの立場、大会運営など多様に存在する「支える」関わり方を学ぶ必要性が認識された。

以上より、カリキュラム・マネジメントにより「支える」関わり方を意識させる機会を作り、自分に合った関わりや役割を理解することが重要であると考えられる。これにより、支えるスポーツに対する興味・関心が高まる可能性があり、豊かなスポーツライフにつながるきっかけとなるのではないだろうか。保健体育授業における「支える」学習は、今回の審判を中心とした学習だけではない。その他の「支える」関わり方について、授業実践を継続的に行うことが求められる。

また、今回の授業実践では、奉仕的活動や社会還元的な活動場面で、自分のもっている能力を発揮・活用す

ることについて明らかにすることはできなかった。課題として、体育授業の各単元で、仲間と共に技能の向上を図るための人間関係を構築すること、得意な生徒も不得意な生徒も主体的に活動する場をさらに設けること及び生徒の実態に応じた学習形態を提案することが挙げられる。

5 今後の展望

(1) 成果

研究の結果と考察を踏まえ、今回の実践が継続的に行われれば、体育授業を通じて生徒の運動やスポーツに対する「支える」関わり方が意識化・行動化される可能性が示唆された。また、本実践を通じて運動やスポーツを楽しむ仲間との関係性や愛好的態度を高めるためには、男女共習やグループ学習において、運動に対する自信の有無に関係なく協働することが重要であることも示された。

今後、体育授業における幅広い「支える」学習の継続が促進され、体育理論の学びや各種目の特性を生かした授業、仲間との教え合いから指導者・コーチの立場など多様に存在する「支える」関わり方を意識させることで、生涯スポーツへの接続や「支える」という観点から運動やスポーツを楽しむ人の育成につながることを期待される。

(2) 課題

課題として2つのことが挙げられる。1つは、本研究での実践は審判に焦点を当てて行なったが、卓球とバドミントン以外の球技、陸上競技、水泳、器械運動など、全ての運動領域で同様の実践を行う必要があることである。また、競技種目により、専門的知識や技術を要するあるいは判定が難しいものもあることから、審判を行うためのルール・審判法の学習を各単元に設定することも挙げられる。

もう1つは、「支える」学び方を通じて運動有能感を高めるうえで、統制感と受容感の向上につながる計画を整える必要がある。これらの課題から、中学校3年間を見通したカリキュラム・マネジメントを計画的に行わなければならないだろう。

本実践では運動有能感が高まらなかったため、将来の「する」スポーツへの参加、運動やスポーツへの肯定的な感情へのつながり、成人期への持ち越し効果につながるという仮説は実証できなかった。しかし、支えるスポーツの価値意識や運動有能感の向上につながる可能性を踏まえ、授業計画を見直すことで、再度検証する価値があると思われる。